「クリスマスは命を発見し、ともに喜びあう日」

✚主のご降誕、おめでとうございます！

毎年、クリスマスは世界中で、その国や地域性などとの結びつきのなかで祝われます。この日は一体何なのかと聞かれたら、皆、口をそろえて「イエス・キリストが生まれた日」と答えるでしょう。イエスが何をしたのかを知らなくても、です。まず、「この日に一人の命の誕生を全世界で祝われることが何を意味しているのか？」と問いかけることから始めましょう。実はそれが最も大切なことなのです。

この問いかけは、狭い意味で祝われる、つまり、キリスト教徒によって祝われる出来事を超え、世界中のすべての人によって祝われる出来事であることに気付かせてくれます。なぜなら、クリスマスがどんな時代、どんな状況にあっても、一つの命の誕生を皆で喜ぶことができることを教えているからです。もちろん、誕生したイエスが神のひとり子であるとキリスト教徒は信じているので、彼らにとって特別な日であることは当然なのですが、たった一人の命の誕生を純粋に喜ぶことのできる“わたしたち”だったら、時代や文化、国家、人種や言語の違い、生まれた環境などに左右されずに理解し合うことや支え合うことができるはずだと気付かされる意味において、すべての人にとっても特別な日だと言えるのです。

イエスが誕生した時の様子についてはマタイとルカによって福音書に記録されています。そこには、温かいベッドの中ではなく馬小屋（厳密に言うと馬小屋ではなくて洞窟のような、動物たちが雨風をしのぐための一時的な避難場所）において「飼い葉桶」の中で生まれたとあります（**ルカ 2 章 1 節～21 節を参照**）。「飼い葉桶」とは家畜の餌を入れる箱のことで、少なくとも屋根のある屋内で生まれたわけではないのです。劣悪な環境といっていいでしょう。とても人間が生まれてくる場所ではありませんでした。不運な家族？かわいそうな家族？普通ならそう考えてしまいます。けれども、母親であるマリアはイエスの誕生が予告されたときに「**わたしは主のはしため（しもべ）です。お言葉どおり、この身になりますように**」（**ルカ 1 章 38 節**）と答えて、自分たち家族の身に起こることすべてを受けとめていましたから、イエスが生まれることの喜びだけで満たされていました。周りには誰もいない、ひっそりと誰も気づかれないまま生まれた一つの命。でも、この小さな命の誕生の出来事は、命を守る人、真理を探究するために人生をかけていた人には知らされることとなります。それが羊飼いと占星術の学者です。羊飼いたちは天使たちによって知らされ（**ルカ 2 章 8 節～20 節**）、占星術の学者たちは研究していた星によって導かれました（**マタイ 2 章 1 節～11 節**）。